

正岡芸陽小論

— ある反近代主義者の陥穽 —

荻野富士夫

1

芸陽正岡猶一(1881 - 1920)の名は、20世紀初頭の激烈な文明批判の論者として記憶されている。登張竹風によって「真に当代絶えて無くして僅に見るところの健筆家」⁽¹⁾と当時評されたように、一時期、縦横無尽の論陣を張った論壇の風雲児的な存在であった。また「罵倒の権化」という世評も定着していた。罵倒の噴出というかたちをとったその文明批判は、維新変革以来の日本の近代化に根源的な疑問を投げかけ、偽善的社会の破壊を第一義にするという、日清日露戦間期に顕在化した「亡国」状況を憂慮する多くの論者のなかでも、最も鋭利で衝撃力に満ちていた。一方、その反近代的な文明批判のうちには社会主義思想に近接する部分もあった。⁽²⁾

小論の課題は二つある。一つは、芸陽の文明批判の論理と特質を検討するなかで、彼が論壇における思想的名声を獲得しながらも短期間でそれを失なうことの原因とその意味について考えてみることである。もう一つは、彼の社会主義観の転回に着目して、初期社会主義運動の勃興期におけるそのありようの一つに論をおよぼすことである。総じてこの小論では、1900年前後の「亡国」状況を知覚した人々が、何を目ざして、どのようにその状況を打開しようとしたのか、という問題に対して、反近代主義者のなかに位置する芸陽という一事例

(1) 登張竹風「正岡芸陽に与ふる書」『舌筆録』所収 166頁

(2) その結果、芸陽の文章のごく一部(『嗚呼売淫国』〈抄録〉・『人道之戦士』)は、「明治文学全集」の『明治社会主義文学集(二)』に収録されている。

を提示してみたい。

2

1901年3月、『新聞社の裏面』で論壇に打ってでた正岡芸陽は、その年、『婦人の側面』（4月）、『時代思想の権化——星亨と社会——』（6月）、『滑稽なる日本』（9月）、『嗚呼売淫国』（10月）をいずれも新声社から相ついで刊行する。これらの精力的な評論活動は1902年にも持続される。弱冠20歳という青年の早熟多彩ぶりには目を見張らされる。

『新聞社の裏面』執筆の因をつくった新聞記者生活やそれ以前の経歴は、家庭的に恵まれず各地を放浪したこと、キリスト教への傾倒や北清事変の際の従軍記者体験などを除いて、現在のところ不分明である。したがって、芸陽は私たちの前に突然、激烈な文明批判論者として登場する、とあってよい。おそらく何年かの新聞記者時代を通じて「驚くべき社会の醜怪なる多くの事実」⁽³⁾に接し、社会批判の意識を醸成させてきていたのだろう、一挙に毒舌罵倒の言葉が噴出する。次第に蓄積され発酵してきた社会批判のなかに、のちに述べるような芸陽の思想的特質を説明する材料が見いだされるはずだが、いまはそれが不明のまま、芸陽の思想の検討に進まざるをえない。

芸陽は当初、すべての著作を新声社から刊行し、のちには『新声』の編集を受けつぐなど、新声社との関わりは深い。新声社の同人となったのは『新聞社の裏面』刊行前後の1901年前半と推測されるが、その接触は両者の思想的境地からみて必然的なことだった。すなわち、佐藤儀助の設立した新声社は「青年ノ同志ト風氣ノ革新ヲ図ル」を目的とする青年革風会を社内に設け、『新声』創刊号（1899年1月）巻頭には「人道風俗の壊敗せる、豈今日より甚しきあらんや」との危機感を表明して、「彼昏醉せる現社会に、爆裂弾を抛ちて、惰眠を醒覚せしむるもの唯青年ある耳、革新せよ、々々々々」⁽⁴⁾と呼びかける檄文を発表

(3) 正岡芸陽『新聞社の裏面』 3頁

(4) 青年革風会「青年諸卿に檄す」『新声』第1編第1号 1899年1月15日

していた。のちの理想団の先駆的形態ともいえるこの青年革風会は各地に支部組織を設けつつも実際には目に見えるほどの活動はおこなえなかったが、『新声』は「青年機関」として、現社会の惰眠覚醒の論陣を張っていた。そこに芸陽は投じたわけである。芸陽自身、のちに「吾徒は新声第一編第一号に於て宣して曰く『右文左武、次代国民の素を養ひ、直筆讜言、天下の積弊を打破す。』とと云へるもの、之れ社会に対するの声なり」⁽⁵⁾と述べている。創刊以来の愛読者であったかどうかは不明だが、芸陽が『新声』を「吾徒」と意識していたことは確かである。それは、1901年以前の芸陽の社会批判の存在を裏づける。

「新聞社会を去るに臨での一の懺悔」⁽⁶⁾として執筆した『新聞社の裏面』では、新聞を「文明が生んだ新しい魔窟の一つ」⁽⁷⁾と痛罵し、新聞記者を「馬の糞」と酷評する。こうした暴露的な新聞批判は、賛否両論をもって迎えられ、同時に芸陽の名を強く印象づけた。幸徳秋水はのちに『人道之戦士』に序を寄せるなかで、「君の文を読み、深く其稜々の気に驚きて其爛漫の才を嘆ぜり」⁽⁸⁾と述べるほどであった。

新聞＝「社会の木鐸」という観念を、拜金主義の瀰漫の実相を内部告発することによって芸陽は打ちこわしていきが、秋水が感嘆するところの「爛漫の才」は、まもなく文明全般の批判として全面的に開花することになった。まず『婦人の側面』では、「あらゆる迫害と、あらゆる嘲罵の辞とは紛々として女の頭上に投げられる、女の悲鳴、絶叫、号呼の声は未だ天に徹せざるなり」⁽⁹⁾という認識を出発点に、多方面からの考察を加えて、「社会は多数の名を以て弱き女を虐殺せしなり」⁽¹⁰⁾という結論を導く。続く『時代思想の権化』では星亨を時代思想の象徴・縮図とみて、国民が「腐敗混沌の淵底」に蠢めく「銭神の帰依者」⁽¹¹⁾

(5) 芸陽「帝国文学記者に与ふ」『新声』第6編第4号 1901年10月15日

(6) 芸陽『新聞社の裏面』に就て『新声』第5編第4号 1901年4月15日

(7) 芸陽『新聞社の裏面』 3頁

(8) 幸徳秋水「序」『人道之戦士』所収『明治社会主義文学集(二)』収録 181頁

(9) 芸陽『婦人の側面』「自序」

(10) 同前 146頁

であると断じるなど、憤懣を爆発させている。

「新帰朝者」のペンネームで執筆した『滑稽なる日本』では、「明治の時代は嘲笑の時代である、敬虔と尊重との念を欠いて居る時代である」⁽¹²⁾と規定して、「ハイカラー国」と命名する。ハイカラーとは「平凡なる者が大豪傑と見せかけんとする者」⁽¹³⁾の謂であって、それゆえ模倣的であり、守旧的である。ここで罵倒されるハイカラーは、「紳士」階級に属しているが、もはやその「衰亡の機」は近づいているという。なお、芸陽はハイカラーの撲滅を叫ぶのに急で、変わるべき主体を明言してはいないが、それが民衆ではないことは「軽信軽疑の日本人」などの表現から了解される。

『嗚呼売淫国』は、それまでの社会批判を総合した芸陽の代表作と目すべきものであり、そこでは政治・社会からはじまり文学・学生の状況、さらに都会から地方の状況に至るまで、広範囲にわたって冷厳な観察が加えられ、全体を通じて「売淫国」「亡国」という呪咀と絶望感に満ちた形容がなされる。いずれもそうした認識自体は当時一般化していたので芸陽独特のものとはいえないが、その認識の深度において、また痛罵の衝撃度において第一級の質をもつ。たとえば、つぎのようにいう。

日本人は由来かゝる主義（今日主義——引用者注）とかゝる卑賤なる希望（快樂の追求——引用者注）を以て生活し来りし者也、一時代たりとも精細に観察すれば一の理想なるものを把持して、之に向つて其歩を進めし事あらざりき、されど尚当時の社会には一の制裁力を有したりき、以て封建時代の末年に及び尚其甚しきに至らざりしと雖も、今日に至りては正に其極度に達し、風紀は紊乱し、道教は廢頽し、制裁力は鈍り、亦如何とも為すべからざるに至れり、我は之を慨するの余り、風紀なきの国、制裁なきの国、理想なきの国、墮落し果てたるの国の中より其一を撰びて、売淫

(1) 芸陽『時代思想の権化』 143頁

(2) 芸陽『滑稽なる日本』 1頁

(3) 同前 111頁

国としての日本を看んとす。⁽¹⁴⁾

では、1901年に全面展開されたこうした根源的な文明批判・社会批判に通底する特質は何であったろうか。三つのことを指摘できる。第一に、批判が次第に「偽善」という観点に収斂してくることである。社会風紀の弛頹・道徳の墮落などの指摘は、現金主義・現在主義・無道徳などの批判を経て、それらの生まれる源として「偽善」の問題に突きあたる。『嗚呼売淫国』における「偽善なる哉、偽善なる哉、偽善は終にこれ人の代名詞なる乎、人は偽善の牢獄より永遠に脱する能はざる乎」⁽¹⁵⁾ という慨嘆こそ、その後の芸陽の第二の出発点となった。偽善に幾重にもおおわれた日本社会の解剖は翌02年の『偽善百方面』で仔細に展開されるが、この段階でも偽善の領域に属する価値には否定の言葉が投げつけられ、一方では偽善の対極に位置する価値が模索されはじめている。前者は、民権や自由の精神により克ち取られた政治的平等に対する不信であり、「秩序と制裁と道徳と正直なる識別力を欠きたる多数政治は、終に衆愚政治たらんのみ」⁽¹⁶⁾ と断じる。後者は、理性に対する感情の優位、あるいは「錢神の帰依者、情慾の奴隷」に対する義人への憧憬である。

第二に、ラジカルな文明批判・社会批判の背景に、社会変革への強烈な意志が存することである。芸陽は「文壇廓清、社会刷新、これ我徒の抱負なり」⁽¹⁷⁾ といい、「革命の時機既に熟せり」⁽¹⁸⁾ ともいう。そして、変革の方向、状況打開の方策は二様に示される。任侠の道、そして社会主義の道である。まず任侠への関心をみると、それは扶弱挫強・利他心の観点から高く評価される。芸陽は幡随院長兵衛・花川戸助六・バイロンらの侠客らを「人間中の真人間」と呼び、「万物を破壊すべく、以て天下を揜動せしむべく、以て聊か社会の革新を企図するに足るべし」⁽¹⁹⁾ と大きな期待を寄せる。これは先の感情・義人の希求とつな

(14) 芸陽『嗚呼売淫国』 13頁

(15) 同前 41頁

(16) 芸陽『時代思想の権化』 125頁

(17) 前掲「帝国文学記者に与ふ」

(18) 芸陽『嗚呼売淫国』 8頁

(19) 芸陽「任侠論」『新声』第6編第2号 1901年8月15日

がり、やがて英雄・天才待望論へと発展していく。

芸陽はこの時期に限り、社会主義を肯定的に評価する。新声社同人の文集『弱者の声』に載せた「富豪の福音」の冒頭で、つぎのようにいう。

社会主義の名は新しき者也、されど社会主義の実は旧き者也。昔者モーゼス、イスラエルの民に下すに一の律法を以てせり、その精神は即ち社会主義の精神を以て貫通せられたり、社会主義は世に最も新しき者にして、亦世に最も旧き者也。旧約全書は社会主義の精神に依て、其一部を組織せり、新約全書は更に極端なる社会主義を唱道せり。

神の子キリストは社会主義者也、而して神は実に社会主義者也。一卷のバイブルを通じて流るゝ一大精神は、即ち社会主義の精神也、社会的平等、経済的平等、之れイスラエル国民の偉大なる思想が生みし産物なりし也、平等の声、之れ神の声なりき、之れキリストの声なりき、之れ十九世紀以後の社会主義者の声なりき、而して二十世紀の劈頭に於て、日本に於ける最も大なる声たらんとしつゝあり。⁽²⁰⁾

キリスト教と社会主義を重ねてみる理解は、芸陽の少年期のキリスト教への傾倒に根ざしているはずである。ここで芸陽は「社会的平等、経済的平等」に言及して社会主義観の本質に近いかにみえる。しかし、この文章が「富豪の福音」と題して、「社会主義は富豪より其財産を奪はんとする掠奪者に非ず」⁽²¹⁾ という見解をとることからもわかるように、意外に皮相的な理解にとどまっていた。あるいは島田三郎『社会主義概評』を評するなかで、「社会主義は余が常に最も渴仰する者の一也」と述べつつ、「毫も国状の如何に頓着せざる盲蛇流の社会主義」⁽²²⁾ という、おそらく社会民主党的な社会主義への批判を漏らしている。社会主義への肯定的評価は、「弱者」「貧人」の救済という一点にあった。しかも、その点においてのみ任侠への期待とつながる。

(20) 芸陽「富豪の福音」『弱者の声』所収 36頁

(21) 同前 43頁

(22) 芸陽「『社会主義概評』を読む」『新声』第6編第5号 1901年11月15日

第三に、「売淫国」「亡国」などと明治国家に対する最大級の否定的言辞を浴びせかけながらも、否、より正確には浴びせかけることによって、本来あるべき国家像を希求していることである。『嗚呼売淫国』の「嗚呼、日東の蓬萊国、三千年の神仙国、世界の樂園、君子国、此等の美はしき名は聞くもいまはしき売淫国と成り畢れり、国光宣揚之れ久しく国民の希望として存したりしものなりき、日清戦争は国光宣揚の一なりし、憲法発布は国光宣揚の一なりし。而も今は何に依りてか国光を宣揚すべき」⁽²³⁾ という一節は、芸陽における国家信仰を物語る。しかも、この段階で「国光宣揚」の事例として、憲法発布はともかく日清戦争をとりあげていることは、近い将来、明治国家否定の立場が崩されることを予感させる。北清事変への従軍に際しても、「国光宣揚」の観点から肯定的に報道していた模様である。もちろん、「亡国」を語るに急で、あるべき国家像について芸陽は具体的なイメージをもっているわけではないが、少なくとも国家の存在そのものを否定していないことは確かである。しかも、そのことは当時において「亡国」を指摘する人々に共通していた。すなわち、明治藩閥政府の築いた近代日本とは異なる国家、換言すれば第二維新の招来への期待が多くの「亡国」論のなかに秘められていた。

論壇に踊りでた 1901 年を通じて、芸陽は「亡国」の現状を糾弾し、偽善的社会を告発することに終始した。社会的罪惡への鋭敏な着目により、社会主義への共鳴もありえた。そして、このような「破壊」的作業を経て、翌 1902 年において、芸陽流の「興国」の方策が語られることになる。それは、たとえば「吾人は明かに明治卅四年に於て、日本社会の罪惡が極度に達すると同時に、其勢ひの漸く変ぜんとするの、兆候を認むることを得たり」⁽²⁴⁾ と幸徳秋水が書きつけたように、「亡国」的状况からの脱出の燭光がみえはじめたことに照応する芸陽の思想展開だったといえる。

(23) 芸陽『嗚呼売淫国』 147 頁

(24) 幸徳秋水「送歳の辞」『万朝報』1901 年 12 月 30 日 『幸徳秋水全集』第 3 巻収録 377 頁

3

星亨を「時代思想の権化」として描いてから半年後の1902年1月、芸陽は全く対照的に「人道之戦士」として田中正造を描きだす（『人道之戦士 田中正造』）。「最も腐敗せる時代には最も清純なる人物を出す者也」⁽²⁵⁾ ということを「地上の一の法則」とみる芸陽は、正造を「此人間社会廓清の使命を以て生れ出でたるの一使途」⁽²⁶⁾ と呼ぶ。正造への関心はこれ以前の文章にはみえないが、時代の腐敗を象徴する足尾鉍毒事件に芸陽が人一倍の関心を抱かなかつたはずはないし、またこの書で有名な第一四議会における亡国演説に言及しているように、そして直訴事件についても詳細に叙述するように、正造の議会内外の獅々吼や破天荒な行動にも血湧き肉踊らせていたはずである。

芸陽は、正造を英雄・預言者・戦士・救世主と形容し、クロムウェル・ルター・屈原らと比肩しうる人物として賞揚する。そのとき芸陽の認める価値観は、真理・正義・誠実・人情などであり、それらは「人道」という言葉に集約される。それに対し、常識や学問に粉飾された通俗的価値は「偽善」として切り捨てられる。では「人道」と「偽善」の戦いの行方はどうか。「義者の上に迫害を加ふる今日の社会は如何なる社会ぞ貧人に糧を施さざる今日の社会は、如何なる社会ぞや」⁽²⁷⁾ と述べるように、芸陽は暗澹たらざるをえない。そうであるがゆえに、芸陽は「社会廓清」の方策を社会の構造的変革ではなく「人道」を掲げた英雄の活躍に求めていく。「正造の事業は偉大也、されど正造の風を臨むで人道の為に蹶起する者を出す事あらば、正造の事業は更に偉大なりと云ふべし」⁽²⁸⁾ という結びの一文は、『人道之戦士』執筆の目的は田中正造論にあつたのではなく、正造に仮託した英雄待望論にあることを示している。

(25) 芸陽『人道之戦士 田中正造』『明治社会主義文学集(二)』収録 186頁

(26) 同前 186頁

(27) 同前 195頁

(28) 同前 210頁

したがって、必然的につぎの著作は『英雄主義』（刊行は5月）となる。なお、芸陽はそれに先立ち、『新声』誌上で「天才」を論じている。ベートーベンやキーツの悲惨な生涯に想いを馳せ、自称天才の迂遇と破滅を断言し、「吾人は千の凡人を犠牲とするも一人の没常識の人物を得ん事を願はざる能はず」⁽²⁹⁾ といいきる。ここでは当然のことながら、個々の人格の価値は等質ではありえず、非凡人＝天才の凡人に対する優越が絶対的である。すでに前年にみられた衆愚観の延長線上にこの一人の天才の前に「千の凡人」の犠牲を厭わぬ思想はおかれるが、天才願望が強まるにつれ、衆愚観はさらに深まっていく。そして、そのことは『英雄主義』においてはより鮮明にあらわれる。

『英雄主義』（5月）、『裸体の日本』（7月）、『偽善百方面』（8月）という短期間に相ついで著わされた三冊の著作は、芸陽における思索の到達点を示す。すなわち、『英雄主義』は総論にあたり、後二者は日本の現実に即した具体的な「興国」提言の書という構成をなす。もう少し細かにみると、まず「英雄主義」の意味するところが、「英雄を重ずるの主義也、英雄出現を希望するの主義也」⁽³⁰⁾ と明らかにされ、英雄＝「赤裸々の自然児」「下界の神人」「人類中の最も人間らしき人」などと多方面からその絶対的価値を賞賛する。ついで『裸体の日本』は、「現代の日本と英雄との関係を論せしもの」⁽³¹⁾ で、虚偽や形式の日本を破壊して「赤裸々の日本」を建設すべきことを説く。『偽善百方面』はその「赤裸々の日本」の内実をより具体的に叙述しようとしたもので、「日本人は自ら日本人固有の精神を発輝せざるべからざる事」⁽³²⁾ および「国民の自覚」⁽³³⁾ の緊要性が語られようとした。とはいっても、実際の『裸体の日本』『偽善百方面』の叙述は、社会的腐敗と虚偽に満ちた亡国的状況の糾弾に傾きがちであった。それほどにまで偽善的日本の現状に憤慨が積もり積もっていたからであろう。

(29) 芸陽「天才」『新声』第7編第2号 1902年2月15日

(30) 芸陽『英雄主義』14頁

(31) 芸陽『裸体の日本』「自序」

(32) 芸陽『偽善百方面』7頁

(33) 同前 8頁

芸陽における思索の到達点といえるこれら三連作から導きだされる思想の特徴は、やはり三つ指摘することができる。第一に、亡国の根源を「偽善」に求めることが徹底した結果、その対極の価値として裸体・自然・野蛮などの観点が急浮上してくることである。それに伴い、田中正造を賞揚したばかりの人道・正義などの観念も「不自然なる律法」⁽³⁴⁾として排斥される。そして、「善悪無差別の王国」＝「詩歌的生活」を希求するとして、つぎのように展開するのである。

善よ、理性よ、正義よ、汝は何する者ぞ、吾人と反対の性格を有せる汝のあるがために、吾人は屢々吾人の本性を曲げ、吾人の野獸的性情を矯めざるを得ざるに非ずや、吾人は野生也、放縱也、不羈也、磊落也、唯之れにて可也、吾人は悪を愛し、感情に偏し、不正不義ならざるべからず。

吾人の欲する所は善に非ずして悪也、理性に非ずして感情也、正義に非ずして不正不義也、⁽³⁵⁾

「興国」の方向として「赤裸々の日本」をめざし、「自然に帰れ」と高唱することは、芸陽にとって本能主義と同義であり、そこからは優勝劣敗・弱肉強食の考え方が容易に導かれ、それは個々の人間関係から広く国家間の関係にまで適用される。かつて衆愚政治を支えるものとして批判されていた自由民権の思想は、「優勝劣敗」という「人類の約束」により、さらに強力に否定される。

第二に、「今日は正に思想界の革命の時機也」⁽³⁶⁾との認識をもちながらも、急速に社会変革への意欲が後退していくことも特徴的である。それは三方面から説明しうる。まず、優勝劣敗・弱肉強食の信奉者となることにより、弱者への関心・同情心・救済の意志が消滅していき、強者への憧憬が前面にでてくることである。社会変革の目標が、「貧富の懸隔」の解消などの社会平準化から、「偽善的日本」の破壊→「赤裸々の日本」の建設という、それ自体観念的な次元に

(34) 同前 39頁

(35) 同前 42頁

(36) 芸陽『裸体の日本』12頁

変質してしまったのである。つぎに、いまのことと関連することだが、社会主義観の変質の問題である。「多数社会の最大多数の幸福を増進せんとする社会主義の如きは吾人の満足し能はざる所」⁽³⁷⁾ という『英雄主義』の時点における社会主義観は、『偽善百方面』に至って「社会主義は虚偽の思想也」⁽³⁸⁾ 「虚偽なる社会主義は早晚其覆滅を免るゝ能はざらん」⁽³⁹⁾ と否定の対象となる。前年の社会的・経済的平等を実現するものと共鳴していた社会主義観が、僅かの中に180度の転換をしたわけである。最もラジカルな社会変革の手段である社会主義を敵対視することは、変革の意志の後退を物語る。

もう一つは、社会主義への共鳴が消えるかわりに、変革の役割を英雄・天才に求めることである。前年において任侠に傾倒していたことをすでに指摘したが、本能主義の積極的肯定により、英雄主義を「人間最上の情想」⁽⁴⁰⁾ と絶賛することになった。芸陽における英雄像の理解は、常識・道徳・宗教などあらゆるものから拘束されない超絶的存在であり、多数の凡人＝民衆の服従と奉仕を当然のこととする。では、そうした英雄の出現は期待しうるのか。この現実問題に逢着することによって、芸陽の論はもう一步社会変革より遠ざかる。すなわち、「吾人の望むが如き人物の出づることあらば、そは必ずや金銭を重ぜざる、生活に困難せざる貴族社会より出づるものならざるべからず」⁽⁴¹⁾ という解答を導くのである。貴族主義にいきつくことによって、平民主義は当然ながら排撃される。しかも、この論理と相まって、「人間に賢愚の差あるが如く、社会には階級なかるべからず、治者は上位に居るべく被治者は下級に居らざるべからず」⁽⁴²⁾ という認識をみると、もはや変革の意志自体が放棄されたも同然といえよう。

(37) 芸陽『英雄主義』 14頁

(38) 芸陽『偽善百方面』 92頁

(39) 同前 93頁

(40) 芸陽『英雄主義』 169頁

(41) 芸陽『偽善百方面』 103頁

(42) 同前 91頁

三連作に流れる第三の特徴は、依然として亡国状況を厳しく糾弾する一方で、あるべき国家像の内実が次第に鮮明になってくることである。それは、二つの方向からみてとることができる。一つは、優勝劣敗の応用による「強国が弱国を列呑するは自然也」⁽⁴³⁾ という帝国主義論、自由民権＝代議制を否定した英雄独裁による専制国家論の主張である。もう一つは、『裸体の日本』の書名にもうかがえる「日本」に即した国家像の模索である。この段階で芸陽の考えるあるべき「日本」とは、「一面に於て精神上の鎖国攘夷をなして、日本固有の精神を以て、更に武士国を建設せよ」⁽⁴⁴⁾ という主張にうかがえるように、反近代・反文明を基調とし、一切の偽善を排した国家という抽象的な次元にとどまる。それは任俠論を受けついで「東洋主義」＝オリエンタリズムとも表現されるが、その前提には「世界の雛鳳たる国民、地球上に於ける最秀児たる日本人」⁽⁴⁵⁾ という独断的認識が横たわっている。

論壇に登場後、全身で反文明・反近代主義を高唱し、亡国状況を罵倒することに全力を注いだ芸陽は、1年余りで燃焼しつくしたかにみえる。亡国状況の糾弾において最も精彩を放ちながら、その亡国状況からの脱却・興国像の模索という点になると、1902年の三連作にはっきりとみてとれるように、華々しい外形を装いつつ空疎な内容となる。野蛮や自然への回帰を主張することは一見非現実的だが、それが本能主義の発揮という意味と等置された途端に社会や国家間における強者の容認という現実的な論理となる。1903年6月の『新時代の道徳』はそうした強者の論理がより鮮明に打ちだされた著作である。

『新時代の道徳』の論理を追うことはそれほど意味がない。ただ、「蛮力に依頼せよ」「私慾を満足せしめよ」「余はシーザル也」「弱肉強食」などという章名をたどりながら、芸陽の思想の大枠が前年の延長線上にあることを確認すれば十分である。なお、強者の論理という点は、「世界は平等に非ず、弱者の肉は強

(43) 芸陽『英雄主義』 147頁

(44) 芸陽『偽善百方面』 102頁

(45) 同前 6頁

者の食となる事は天の確定せる意志也、然らば弱者となりて肉とならん乎、強者となりて喰はん乎、問ふまでもなく吾人は強者たらざるべからず」⁽⁴⁶⁾、および「遼東半島の還付、健忘の国民も尚其当時の無念を記憶すべし、然り無念也、無念なりと雖も、弱者の無念は、無念として通有せざる也、吾人は唯強者となりて弱者を圧するの期を待つべきあるのみ」⁽⁴⁷⁾ という二つの引用に明らかであろう。

こうして、芸陽における文明批判論者としての思想的生命は、強者の論理の信奉者となることにより、おわりをつげた。『新時代の道徳』のなかでも「現代の思想、現代の精神なるものは、……之れを概括すれば偽善主義也」⁽⁴⁸⁾ と述べているが、もはやその衝撃力は完全に薄れている。

なお、芸陽は経営的に行きづまっていた『新声』を佐藤儀助から森山吐虹に譲渡する際の仲介者となり、1903年9月以降、新声社主幹として「一切の事務と雑誌以外の編輯を主宰」し、合わせて『新声』誌上で活発な論陣を張った。「登張竹風に答ふる書」「文壇清潔法」「奉坪内大先生書」「與植村正久氏書」などで、そこでは露骨な強者礼賛などは展開されていないものの、「罵倒の権化」の本領が発揮されるにとどまり、文明批評・社会批評は稀薄になっている。非凡や英雄を憧憬する念が強いだけ、「僕は世に怨みあれども世に恩なし、今日の僕は僕の力也、明日の僕も亦僕の力也、一毫も世に負ふ所なく、人に求むる所なし、天地に俯仰して僕は唯僕一人を見るのみ」⁽⁴⁹⁾ と述べるように孤高・孤独の意識は強まり、社会的弱者の側に位置する姿勢はみられない。したがって、「與植村正久氏書」でキリスト教会の現状を「実に近世の牢獄」「男子の去勢所」⁽⁵⁰⁾ などと鋭く射た批判をなしえても、その糾弾が変革に結びつくことはなかった。いわば、罵倒が言葉だけの空回りにおわってしまうのである。

(46) 芸陽『新時代の道徳』 139頁

(47) 同前 148頁

(48) 同前 156頁

(49) 芸陽「登張竹風に答ふる書」『新声』第10編第6号 1903年12月15日

(50) 芸陽「與植村正久氏書」『新声』第11編第4号 1904年4月15日

罵倒は『新声』誌上にとどまらず、『二六新報』の紙面を借りて「当世百先生」として繰り広げられた結果、人身攻撃・名誉毀損として諸方面からの非難をあびた。また、事情は詳らかではないが、1904年4月には「右者本社と一切関係無之候」と新声社から追われる。こうした四面楚歌の状態は、やがて芸陽に転機を与えていく。

4

1904年後半の芸陽の動静は不明だが、1905年になると、再び転回を遂げる。2月刊の『文豪ラスキン』では、戦勝に酔う日本の現状に批判をもちつつ、ラスキンを「平和主義の福音宣伝者」⁽⁵¹⁾などと呼び、かつての優勝劣敗一辺倒の論から遠ざかりはじめていたが、ジョン・ラボックの著書の翻訳『自然美論』（4月）では急転回した姿をみせる。「序」において、「余は曾て人生の不遇を歎じ、朋友の離散を恨み、社会の腐敗を慨き、煩悶し、懊惱し、熱狂し、痛罵し、而して尚言ふべからざる大なる不平を余したりき」⁽⁵²⁾と過去を顧みる。たしかに、論壇に登場以来の芸陽は、熱狂・痛罵のかたまりであった。青柳有美が評するように、「満身悉く是れ破壊力」⁽⁵³⁾であった。しかし、芸陽は次第にそれを「無味乾燥」と感じはじめていた、という。そのようなとき、ラボックの描く楽園——「朝に昇光に輝く海の壮快あり、夕に紫雲たなびく西山の静閑あり、野に無言の芳香に薫れる花あり川に潺々として流るゝ清き水あり、此世界は夫れ快樂に充てる一大楽園にあらずや」⁽⁵⁴⁾——と出合い、芸陽は社会観・人生観を一変させる。それは熱狂・痛罵の行きづまり、あるいは英雄主義・天才主義の破綻の結果とみるのが妥当であろう。

そして、芸陽は「人の道は唯美を求むるの心を進むべき事あり」⁽⁵⁵⁾という『人

(51) 芸陽『文豪ラスキン』159頁

(52) 芸陽訳『自然美論』「序」

(53) 青柳有美「序とかいふもの」芸陽『それでも女か』所収

(54) 芸陽訳『自然美論』「序」

(55) 芸陽『人道論』24頁

道論』を著わす（7月）。この無節操ともいえる思想の変り身の早さこそ芸陽の特徴にほかならないが、それゆえこの『人道論』に思想史上の価値はみいだせない。ただ、芸陽論の最後において、つぎの点を指摘する必要がある。つまり、英雄主義に伴って顕在化した社会主義の否定視・帝国主義の肯定視が、英雄主義の放棄——「平凡即ち人道也」⁽⁵⁶⁾などの表現——後も、そのまま保持されることである。「社会主義は一の理想也、更に極端に言へば、詩人の空想也、……社会主義の人々は、此理想を現在に実行せんとするが故に、勢の趨く所、必ず現在社会を破壊し、多数の不幸なる人を作り出し、而して現在の世界を一大動乱の世たらしめずんば止まざらんとす」⁽⁵⁷⁾という反社会主義観は健在であり、日露戦争は世界に対する二度目の人道的貢献（一度目は日清戦争）、ロシアは「人道の敵」とみなされるように、帝国主義戦争への疑念は一つもない。

その後、芸陽はポーツマス講和会議に『やまと新聞』の特派記者として派遣されたのを機に新聞界に復帰、『やまと新聞』『大阪日報』に関わる。「大逆」事件で、幸徳秋水が湯河原で検挙される際、田岡嶺雲とともに多少の関わりをもつが、それは偶然のできごとであり、幸徳とは旧知の間柄以上の接触はなかった。嶺雲とは北清事変の従軍記者仲間以来、「当世を罵る」⁽⁵⁸⁾ことにおいて意気投合した間柄であった。まもなく『数奇伝』に芸陽は「題数奇伝」という漢詩の序を寄せ、「文章独有嶺雲在。光焰吐来万丈長」⁽⁵⁹⁾と嶺雲を賞揚するが、自らについていえば、ほぼ同時点で「我輩に至つては真個の自己主張主義者、近来算盤を膝にし、専ら強にヘコタレ、弱に威張る」⁽⁶⁰⁾と卑下せざるをえない状況に立ちいたっていたのである。

(56) 同前 130頁

(57) 同前 15頁

(58) 田岡嶺雲「豆南の客舎より芸陽に復す」『中央公論』1909年3月

(59) 芸陽「題数奇伝」嶺雲『数奇伝』所収『田岡嶺雲全集』収録 第5巻 453頁

(60) 芸陽「序」鶴城学人『此筆二十年』所収『明治人物論集』（『明治文学全集』）収録 368頁

5

20世紀初頭の最も激しい文明批判・近代批判の論者といえる正岡芸陽が、論壇登場後の最初の2年余りに光彩を放ちきってしまったかのように、その後、精彩を失うことになるのはなぜだろうか。その解答は、彼の文明批判・近代批判の質そのものにある。反近代主義を標榜し、亡国状況を罵倒しつくすかのように全エネルギーを注ぎこみ、やがて天才主義・英雄主義の鼓吹に重点を移すが、そのときの転換の動因は、反近代主義→野蛮・自然への回帰にある。近代文明の全否定が一足飛びに野蛮・自然状態への憧憬に結びつくことにより、芸陽は二つの陥穽にはまる。一つは、野蛮・自然状態の法則として優勝劣敗・弱肉強食という皮相な進化論理解にしか目が届かず、相互扶助の法則の存在を無視することである。この独断的な理解が芸陽の本来的資質とでもいうべき英雄・天才願望と重なったとき、亡国状況糾弾の根底そのものを揺るがす国家信仰が強まる。

もう一つの陥穽は、近代の全否定の仕方そのものにある。芸陽は明治国家・社会、ないし19世紀文明という眼前にある近代に腐敗や矛盾や悪徳をみいだして「亡国」と叫んだわけだが、そこから普遍的な近代全体への否定と突き進んだ。したがって、その対極には自然や野蛮しかありえなかった。普遍的な近代がある一つのかたちとして発現した近代日本・19世紀文明を短絡的に近代一般と結びつけて否定したところに第一の陥穽もあった。近代日本・19世紀文明とは異なる、もう一つの近代を芸陽は模索しようとはしなかった。それだけ眼前の近代の腐敗・矛盾・悪徳に憤懣が鬱積し、それを爆発させることに心を奪われていたのだろうが。

しかし、芸陽は近代の対極にもう一つの近代ではなく、自然・野蛮をおいたことによって、つまずいた。ここに、反近代主義者のたどる一つの道があった。